

インド仏教から見た自然観の可能性

著者名(日)	渡辺 章悟
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究
号	1
ページ	37-42
発行年	2007-03
URL	http://doi.org/10.34428/00003372



インド仏教から見た自然観の可能性

東洋大学文学部

渡辺 章悟

「エコ・フィロソフィ」研究 第1号

Eco-Philosophy Vol.1

東洋大学「エコ・フィロソフィ」

学際研究イニシアティブ 2007年3月



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

インド仏教から見た自然観の可能性

文学部 渡辺 章悟

キーワード；ピュシス，ナートゥーラ，プラクリティ，器世間，草木，成仏，
一根の生命，輪廻，精霊，アヒンサー，有情，植物の命

本稿は、東洋思想の特色とされる「自然と人間とが一体となった自然観」が、どのような可能性を持っているのかを、インド仏教を中心として探ろうとするものである、一般に自然 (Nature) は森羅万象 (もの、現象、性質) を表すが、*Oxford Dictionary*によると、*Nature: the phenomena of the physical world collectively, including plants, animals, and the landscape, as opposed to humans or human creations.* となっていて、自然とは人間と相対するもので、征服すべき対象としてとらえられている。このような自然観は、いつ、どのように生じたのであろうか。

1. ヨーロッパの自然観について

そもそも自然とは、ギリシャ語でピュシス (physis) といい、それをラテン語訳したものがナートゥーラ (natura) であり、そこから英語 nature、フランス語 nature、ドイツ語 Natur が作られる。その本来の意味は「人や物の固有の性質、本性」である。

ギリシャ語では諸説はあるが、一般的に「ピュシス」(physis) は「ピュオマイ」(phyomai)、ラテン語「ナートゥーラ」(natura) は「ナスコル」(nascor) という動詞を語根とするように、自然の原語はいずれも「生む、生ずる」という動詞に由来する。

そこから、生まれたものとしての感覚的に経験される自然、あるいはそれらを貫く世界万有の秩序性、という意味も生まれるのである。

古代ギリシャでは、自然は自己を形成する契機を欠いた、死せる自然ではなく、内部に生成・発展の可能性をもった有機的自然と考えられていた¹。また、ローマ社会においても

¹ ピュシス (自然) の第一の意味は「成長」である。ただし、このピュシスという語は現代のいかなる言葉にも的確な訳語がない。したがって、ピュシスが静的に解釈された場合には時間と空間におけるすべての現象の総体、動的な意味の場合には、湧き起こるエネルギーを含意するという。このことは、F. M. Cornford (*From Religion to Philosophy — A Study in the Origins of Western Speculation*, Cambridge, 1912. 廣川洋一訳『宗教から哲学へ—ヨーロッパの思惟の起源の研究』東海大学出版会、1987, pp.18-19, p.99) も指摘している。また、ピュシスについては、タレスと並んで最初の哲学者と称されるイオニア学派のアナクシマン드로ス (Anaximandrus) (BC7-6) が『自然について』で明確に述べられているという。キケロによれば、彼は「自然本性の無限性とは、万物がそれから生まれ出てくるところのものである、と語った」という。(『アカデミカ第一』II 37, 118) Cf. 『ソクラテス以前哲学者断片集』第一分冊、岩波書店、1996, p.169. また、5世紀後半から6世紀前半の新プラトン派の哲学者シンプリキオスの『アリストテレスの自然学注釈』によれば、「アナクシメネスはアナクシマン드로スの仲間であったが、彼自身も、この人と同じように、基体として存する原質 (φύσις) を一つにして無限である、と主張している」という。この基体の原語も physis である。山本光雄訳編『初期ギリシャ哲学者断片集』岩波書店、1985, p.12 参照。フィシカ (自然学) というタイトルの哲学書は、タレス、アリストテレスを初めとして多くの哲学者が論じているように、ギリシャ哲学者にとって、自然はその主要なテーマであった。

ピュシスがナートゥーラに変わっただけで、人間と自然との対立はなく、人間も他の生物と同様に、自然の一部と見做されていた。

2. キリスト教以降の自然観

しかし、キリスト教世界ではこの事情が一変する。特に中世キリスト教世界になると、世界の創造者と被造物は明確に区分・分離され、神⇒人間⇒自然という階層的な秩序が現れる。人間も自然（Natura）も神の意図により現れる被造物となる。これによって神は超越者として自然に内在することなく存在し、人間も自然の一部ではなくなる。人間と自然は神によって創造されたものであるが、人間は自然を超えて、それを支配するものとされる。こうして人間と自然は対立的な存在となった。

これを自然哲学的な立場から見れば、神は自然の能動的な面（能産的自然：natura naturans）と捉えられ、つくり出された自然（所産的自然：natura naturata）に対する。前者（神）は創り出す自然、すなわち、生み出す自然であり、後者は生み出された自然である。

生み出された自然は人間の外部にあり、人間が支配するための生命を欠いた対象世界となる。そこにはもはや自律性はなく、あるのは機械論的な自然にすぎない。こうして初めて科学文明が対象とする客観世界として、自然が捉えられたのである²。この近代的な科学思想が産業革命をもたらし、人類に生産革命、生活革命を生みだした。

一方では、合理性と利益を追求するあまり、自然の秩序を無視し、自然から一方的に搾取してきた結果、深刻な森林破壊や汚染といった環境破壊をもたらした³。これは超克する自然というキリスト教以降の西欧社会で形成されてきた、人間と対立する自然観がもたらした矛盾とってよいだろう。

3. インドの自然という概念

自然という漢語の概念を言葉として考察する時、対応するサンスクリット語は、スヴァーバーヴァ（svabhāva）、もしくはプラクリティ（prakṛti）があげられよう。svabhāvaは「自ら」という意味の接頭辞スヴァ（sva-）に、「生ずる」という意味の動詞語根ブー（√bhū）を加えた動詞に由来する男性名詞であり、プラクリティ（prakṛti）は「根本の、前の」という意味の接頭辞プラ（pra-）に「造る、為す」という意味の動詞語根クリ（√kr）から造られた女性名詞で、prakṛtyā（本質的に、本来的に）として、しばしば副詞としても用

² 彼らに続いて登場した哲学者によって、この自然哲学はさらに深化する。ニュートン（Isaac Newton 1642-1727）の『プリンキピア』の原題も、『自然哲学の数学的原理』（Philosophiae Naturalis Principia Mathematica）であるように、科学は自然哲学の中の一方法として継承発展してきた。ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）の提唱した「モノドロジー（単子論）」「予定調和説」も自然哲学といえよう。

³ また、自然の脅威を克服しつつ発達した科学文明は、産業資本主義の発達をもたらしたが、一方では搾取する国家と搾取される国家の対立を生みだし、深刻な国家間、社会間の階級間の対立を引き起こしている。環境や自然に対する立場も、この文明観の相違によって大きく異なることも忘れてはならない。

いられる。この意味ではギリシヤ語のピュシス (physis) やラテン語のナトゥーラ (natura) が「生ずる」という動詞を語源とするのに対応する。

確かに、スヴァバーヴァは、「ものの本体、自性という意味で、他に依存することなく、自ら生ずるもの・性質」であるから、自然という漢語に対応する。また、プラクリティにしても、本性、自性という意味であり、根本物質と訳され、サーンキヤ学派などでは、それから万物が展開するという思想（二十五原理 pañcaviṃśati-tattvāni）が生まれた。

しかし、これらには人間を除外する環境という意味はない。インド思想では、「もともとある」という意味での自然と、環境世界という意味の自然を、明確に区別することがなかったからである。

4. 仏教の自然と環境

仏教では自然とは環境をさす言葉ではない。環境世界という意味の語は、世間 (lokadhātu) や器世間 (bhājana-loka) の方が近い概念である。

器世間はいわゆる三千大千世界という宇宙の世界で、それぞれの世界は須弥山を中心とする小世界構造をなしている。それが仏教の世界観における具体的世界であり、有情の住む国土とその上に生じている草木類などを含む。

4～5(世紀頃)のインドの大仏教学者・世親は、主著『俱舍論』で、この世界（器世間 bhājana-loka）が有情の業の増上力 (ādhipatyā) によって生ずることを、次のように説明する⁴。

「この三千大千世界は次のように展開すると認める。諸の有情の共業の増上力によって、下方において虚空に依止して風輪 (vāyu-maṇḍala) が生ずる。広さは無数 (asāṃkhyā) であって、厚さは 16 (lakṣa-yojana) である。このように風輪は、偉大なる Nagna 神が金剛杵で撃っても、損壊しないほどである。〔中略〕諸の有情の業によって、その風輪の上に、雲が集まり、雨の流れが車軸の量のように注ぎ、それが水輪 (jala-maṇḍala) となる。〔中略〕諸の有情の業の働きによって生まれた風によって、その水が飛ばされた時、煮沸された乳が表面の膜を造る理によって、上方が黄金の大地となる。これが金輪 (kāñcana-maṇḍala) といわれる。〔中略〕金輪の上に妙高山 (sumeru) を中心とした九山と八つの海がある。〔中略〕また、すべての有情の共業の増上力によって、空中に日と月と星を運行する風を生ずる。」(AbhK、 pp.158ff)

仏教においては、生きとし生けるものは自分の行為の結果を自分が受け、それぞれの行為に適した世界に生ずる。しかし、世界はそれ自身の行為の結果を持たないから、世界自身が世界を生ずるのではない。それでは世界は何によって造られたのかというと、世界は多くの人々の行為の結果（共業 sādharma-karman）によって生ずるとする。つまり、世界は神によって造られたのではなく、人間によって造られたものなのである。そのため、人間こそが世界の状況に責任を負うものである。

⁴ P. L. Pradhan ed., *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series Vol.8, Patna, 1975, pp.158ff. (『俱舍論』「世間品」Chap.3 loka-nirdeśa)

5. インドの伝統的宗教の自然観

一般にインド仏教では生き物を有情 (sattva)、そうでないものを非情 (asattva) とする。有情は情(心の働き、感情)を持つものという意味で、生きているものの総称として用いられ、狭義には人間を意味する。

一方、心の働きを持たないものが非情 (asattva) であり、山川・土石など精神作用のないものをさしている。草木も一般的には非情とされる。輪廻や悟りの対象も、通常は有情に限定される。

ここには後代の東アジアで考えられたような、草木や山川といった自然を有情 (sattva) とする考え方はないし、草木が成仏するといったような、「非情成仏」(心の働きを持たないものでも成仏できること) の思想は見られない。しかし、修行者の生活を規定する律蔵文献 (Vinaya) では、草木に対する注目すべき規定も見られる。

(1) 一根の生命

律蔵 (Vinaya) の規定には、それぞれの戒条の前に制定される因縁が説かれている。その中で、安居の規定については、以下のような因縁が述べられる。

釈尊当時の比丘たちは、夏の間も遊行していた。そのために生き物が生育する雨期に、植物を踏みつけて、傷つけ、多くの小さな生命を殺しているとして、在家者から非難された。そこで雨期の間は定住して、三ヶ月の夏安居をおこなうことが定められた。

ここで踏みつけられた草木とは、パーリ律によれば、「一根 (一つの感覚器官) の生命」 (ekindriya jīva) であり⁵、『四分律』によれば、「命根想を持つ草木」である。この条項にあるように、草木は「一根の生命」であるから、それをむやみに傷つけることが禁じられたのである。

同様に草を編んでサンダルを作ったり (Vinaya 1.189.12-15)、むやみに木を伐採したり (Vinaya 3.155.33-156.2)、地面に穴を掘ること (Vinaya 4.32.25-28) も、「一根の生命」を害する所以であると言われた⁶。また、別の戒律 (『摩訶僧祇律』) では、草木を焼くことも、「傍・一根 (動植物)」を傷つけるとして禁じている⁷。

なお、ここで述べられる「一根の生命」という術語は、仏典には特異で、むしろジャイナ教によって述べられるものと推定される⁸。

⁵ *Vinaya Mahāvagga*, PTS. vol.1, p.137. なお、この一根はジャイナ教の説くところの触覚であるという (P. S. Jaini, *The Jaina Path of Purification*, Berkeley, 1979, pp.108-111, Lambert Schmithausen, *The Problem of the Sentience of Plants in Earliest Buddhism*, Studia Philologica Buddhica Monograph Series IV, Tokyo.; the International Institute for Buddhist Studies, 1991, p.81)。

⁶ 原実「植物の知覚」(『国際仏教学大学院大学研究紀要』2、1999、p.9) を参照。

⁷ その因縁によれば、比丘たちが寒い雪の降った時に、日を燃やして暖を取ったことが、世人によって非難された。そこでは、「沙門ゴータマが不殺生を讃嘆したのに、比丘たちは火を燃やして地を焼き、「傍・一根 (動植物) をみだしている」と言ったことから、この戒条が制定されたとする。(『摩訶僧祇律』大正 22、no.1425、495a5)

⁸ *Dasaveyāliya-sutta* 4.41. 渡辺研二「ジャイナ教の植物観」『印度学仏教学研究』82、1993、pp.95-96.

(2) ジャイナ教の独特の生命観⁹

ジャイナの存在論は生命原理であるジーヴァ(jīva)と物質原理であるブドガラ(pudgala)からなる二元論である。ジーヴァが自らを束縛する物質をすべて除去すると、解脱に至るとする。その生命原理であるジーヴァには、「輪廻するもの」と、「解脱したもの」(輪廻しなくなったもの、解脱者)との二種があり、さらに「輪廻するもの」は、「動くもの」(trasa)と「動かないもの」(sthāvara)に二分される。植物(vanaspati)は地・水とともに後者に属し、輪廻の対象と考えられている。なお、動物は二つ以上の根(感覚器官)を持ち、植物は一つの根(感覚器官=触覚)を持つものとされる。

(3) パラモン教の草木の輪廻

パラモン教の『マヌ法典』(MS)や『ヤージュニャヴァルキヤ法典』(YVS)でも、人間が草木に再生することをはっきりと述べている¹⁰。

『マヌ法典』ではサーンキヤ哲学を背景にして、一切の存在を、サットヴァ(純質)・ラジャス(激質)・タマス(暗質)という三つの性質(グナ)からなり、この性質によって、神・人間・動物の三種に生まれるとする。さらに、この三種が赴く生存にも、各人の行為と知識の違いによって、上・中・下の三種の別があるという。

- ①「タマスの性質に基づく最低の帰着点は、動かないもの(植物)、虫類、魚類、蛇、亀、家畜、野獣であり、中位の帰着点は、象、馬、シュードラ、卑しまれる蛮族(ムレッチャ)、ライオン、虎、野猪であり、最高の帰着点は、旅芸人(チャーラナ)、スパルナ(神話的な鳥)、詐欺師、ラクシャス(羅刹、悪魔)、ピシャーチャ(食血肉鬼)であるとする。」(MS 12. 41-44)。
- ②「人は身体的行為の罪により植物に、言語的行為の罪によって鳥獣に、心による行為の罪によって最下層の生まれになる。」(MS 12.9)
- ③「グル(師)の臥床を犯す者(師の妻と淫行をなした者)は、何百回も、草・灌木・蔓草・肉食動物・牙を持つ獣・残忍な行為をなす猛獣の〔母胎に入る〕」(MS 12.58)¹¹。
- ④「黄金を盗む者は、ウジ虫・虫・蛾になる。またグルの床を犯す者は、次々と、草・灌木・蔓草となる。」(YVS 3.209)¹²

以上のように、ジャイナ教やパラモン教が説く輪廻の世界には、動かざるもの、すなわち草木がその領域に含まれていたと言える。

(4) 「草木を傷つけるべからず」(伐草木戒)

一方、パーリ律には、「草木を傷つけるべからず」という戒条もある。この戒が制定され

⁹ 藤永伸「ジャイナの生命観」『日本仏教学会年報』第55号、1990、pp.57-68。渡辺研二「ジャイナ教の植物観」『印度学仏教学研究』82、1993、pp.94-100。

¹⁰ 以下の用例は、杉本卓洲『五戒の周辺—インド的生のダイナミズム』(平楽寺書店、1999、pp.116-120)、原実、前掲論文 p.4 にもとづく。

¹¹ *Manusmṛti* 12.58.

¹² *Yājñavalkya-smṛti* 3.209。井狩弥介・渡瀬信之共訳『ヤージュニャヴァルキヤ法典』東洋文庫 698、平凡社、2002、p.172。

る因縁は、次のようになっている。

仏がアーラーヴィーに住しておられた時、一人の比丘が木を切った。ところがそこには樹神が住んでいて、樹神は怒ってその比丘を殺そうとしたが、なんとか思いとどまって仏に救いを求めた。そこで仏はその樹神に別の木を与えて事なきを得た。

その時、人々はこの比丘に対して、一根の生命を傷つけるものだと言って非難した。そこで仏は、世間の人々は樹木に生命があるという思い（有命想 *jīvasaññin*）を持っているとあって、「草木（*bhūta-gāma*）を傷伐すればパーチッティヤ（*pācittiya* 波逸提）罪である」という学処（戒律の項目）を制定した。

この条項にはさらに注釈が加えられ、草木とは根・茎・節・枝・種子から生ずる五種であるといい、それぞれに具体的な植物名が列挙される。（*Vin*, IV, 33～34）

ここでいうパーリ語ブータ・ガーマ（*bhūta-gāma*）とは、草木を意味するが、実際の語義は「精霊などの住処」である。

樹木にはさまざまな生き物が共生している。蛇や蚊やバッタなどの昆虫や鳥類から、精霊や神々までがそこを住処としている。その樹木を伐採することは、これらの有情が住処を失い、命を奪われることでもある。だから樹木の伐採が非難されるのである¹³。

まとめ

インドの思想や仏教思想には、慈悲にもとづいたアヒンサー（不殺生）の思想があり、さらにその根拠には輪廻思想に見られるような、動植物の一体感、生命の一体感が連綿として見られる。伝統的な仏教では植物は非情（*asattva*）であり、輪廻の対象とはしないが、ジャイナ教やバラモン教では輪廻の対象とし、「一根の生命」として尊重し、仏教もそれを受容した。

また、『俱舍論』に見られるような仏教の哲学によれば、生きとし生けるものの世界（有情世間 *sattva-loka*）の場としての器世間（*bhājana-loka*）は、有情の行為の総体として結果するものであり、どこまでも人間中心の思想が見られる。しかし、その人間も環境世界の中の一員であるという、相即的な自然観、世界観こそが、東洋の自然観の特徴であった。

現代の文明社会に対し、ある特別なシステムが、根本的な解決を導くとは思えないが、このような「人間と自然との一体感、人間と環境との緊密な関係」を強調する東洋の *Eco-Philosophy*こそが、一人一人の意識の改革を促し、社会と人間の関係を公正な状態にすることができる思想であり、今後の我々の文明を是正する可能性を持っているのではないだろうか。

¹³ 『根本説一切有部毘奈耶』（大正蔵 23、775c）に説かれる。

Summary

Potentiality of the View of Nature from Indian Buddhism

WATANABE Shogo

In this report, I investigate the potentiality that the distinctively Asian thought, "human beings are united with nature," holds in considering sustainability.

In Buddhism, there is distinction between sentient (*sattva*) and non-sentient beings (*asattva*). This is common to Indian thought, where sentient beings transmigrate in *samsara* while non-sentient beings do not become object of transmigration. However, the distinction between the animal and the plant is delicate and subtle. Animals are clearly the object of *samsara*, while plants can also become the object of *samsara*, depending on the documents. In this sense, the plants are very close to human beings and animals.

According to the cause and effect theory of Buddhism, all sentient beings receive the result of their action, and they dwell in the world that is suitable for their action. However, the world itself does not have a result of its own action. Instead, it is assumed that the world is created by the result of actions of all beings (*sādhāraṇa-karman*) that dwell in it. God did not create this world, and it was made by all beings.

I compare the view of nature and the worldview of Buddhism with those of other religions in order to consider a relationship of the humans and environment that is not in mutual opposition.